

## ゲーム形式で思考力アップ

## 新聞社の取材

授業にディベートを取り入れ、その実践内容を大学の学会で発表したことがありました。そこに新聞社の記者が取材に来ていました。数日後、その記者から連絡がありました。ディベートの国語の授業を取材させてほしいとのことでした。あの当時は、学校でディベートが行われることは、まだまだ珍しかったのです。新聞記事の内容は、以下の通りです。

## ゲーム形式で思考力アップ 国語の授業にディベート導入

福島市鎌田の市立北信中学校（大草栄治校長、生徒数930人）では、1年生の国語の授業にゲーム形式で討論を進める「ディベート」を取り入れ、生徒が論理的に考えて意見を発表したり話を聞いたりするのに役立っている。

ディベートはアメリカの学校を中心に発展した討論の形式で、一つのテーマについてグループで、「肯定派」「否定派」に分かれて議論し、見学者が判定員として「筋道は通っているか」「質問、応答は分かりやすいか」などを採点、得点で「勝ち負け」を判定する。わが国では最近になって小学校や中学校で取り入れられるようになってきている。

同校でディベートを実践しているのは、1年生の国語担当の高澤正男教諭（30）。昨年、3年生のクラスで実験的に行い、生徒が論理的に考え、意見を発表する姿に効果を確認し、今年の9月から1年生の国語の授業に取り入れ始めた。

## 購買部設置問題では否定派に軍配上がる

今月18日、1年6組の5時間目のクラスで行われたディベートのテーマは「購買部は必要か」。同校には2年前まで「購買部」があったが、利用者減や担当教諭の負担増を理由に廃止されていた。

まず両派が自分たちの考えを「立論」として3分間で陳述、1分間の「作戦タイム」ののちに討論に入った。

討論では「文房具を忘れたときに校内で買える」（肯定派）、「お金を持ってくるので『恐喝』の原因になる」（否定派）、「学校が決めたノートは遠くの文房具店にしかない」（肯定派）、「休みを利用して買い置きすればよい」（否定派）と、間髪を入れない白熱した議論が展開。

中には「購買部担当の先生が働き過ぎで労働基準法違反になる」（否定派）という指摘も。

判定員の判定は26対3で否定派に軍配が上がった。高澤教諭が「否定派の最終弁論が説得力があったね」と論評、討論が終了した。

高澤教諭は「ディベートを始めてから、今まで人前では話せなかった生徒が日常的に話せるようになったり、論理を組み立てるために協力できることを生徒が分かってきた」と、ディベートの成果を説明する。「話す力を鍛えることができるので、これからも授業に取り入れていきたい」と意欲満々だ。

しかし下調べや答弁書の準備などに時間がかかったり、相手をやり込めることに終始してしまったりと、「万能とは言えず、課題も多い」という。

福大教育学部の高野保夫教授（国語科教育）は「国際化の中で、物おじせずに考えを述べられるよう指導は必要」と話し、「表現力、思考力を高めるという点から、中学でもどんどん取り入れていくべきだ」と話している。